

【演奏曲目の選定 30年の歴史と今後の展望】

鈴木 優

私は、合唱団創立時（1988年4月）より30年間、つくば古典音楽合唱団音楽監督としての仕事のひとつとして演奏曲目の選定にあたってきました。今回を含む32回の演奏会で取り上げた音楽の作曲家は44人、演奏した曲目は122曲に上ります。創立30周年記念に際し、これまでの選曲の足跡をたどり、さらに今後の展望について書いてみたいと思います。

最初に起草された活動指針には「主に西洋の宗教曲を取り上げ音楽芸術を追求し、同時にその精神的背景を探ることにより心を豊かにしていく」という目的が掲げられています。同指針には演奏曲目として「まず16世紀のビクトリアやラッソから初期バロックのシュッツ、モンテヴェルディに至る範囲を中心とし、将来はバッハ、モーツァルトなどにも取り組む」とあります。私の選曲に対しての考えは、一方では自分の音楽的な興味を実際の音にすることによって実現したいということ、そしてもう一方では合唱団の現実的な状況に応じた最善手を考えるということです。当初の選曲では、20数名という規模の合唱団が演奏可能であり、しかも高い音楽的内容を持つ音楽が選ばれています。

当合唱団のレパートリーとしては、1400年代から現代までの約600年間の音楽という幅広い選択肢があります。その中で選曲に当たっては、合唱団のその時々々の音楽的实力や規模、さらには運営上の予算といった現実的な要素を考慮しなければなりません。予算に見合った編成のオーケストラやソリストで演奏できる曲を選ぶことが重要であると言えるでしょう。

過去の演奏会で取り上げた作曲家を、生まれた国、時代別に集計すると以下のようになりました。

1. 作曲家の生まれた国別

国名	(人)
ドイツ	18
オーストリア	10
イタリア	10
スペイン	2
フランス	2
イギリス	1
エストニア	1

2. 生年別

生年代	(人)
1400-	1
1500-	13
1600-	8
1700-	10
1800-	9
1900-	3

3. 音楽史的区分

区分	(人)
ルネサンス	6
バロック	17
古典	5
ロマン	11
近・現代	5

4. 取り上げた回数 Best 6

順位	作曲家名	(回)
1	J.S.バッハ	13
2	モーツァルト	11
3	シュッツ	7
4	バレストリーナ	6
5	ハイドン	5
6	ビクトリア	4
	シューベルト	4

30年間の選曲の傾向を振り返ると、おおよそ10年ごとに大きな変化が見られます。最初の10年はルネサンスあるいは初期バロック音楽を中心とするア・カペラでの演奏を多くしました。次の10年間はモーツァルトのレクイエムに始まり、メサイアやバッハ、フォーレなどの様々な様式の有名な大曲に取り組みました。そして直近の10年間はモーツァルト、ハイドン、シューベルトなど「ウィーン古典派」の音楽を集中的に演奏しました。この取り組みは、管楽器も含めて古典派様式の古楽器奏者の協力を得られるようになったことに多くを助けられています。こうしてみると選曲ひとつをとっても、合唱団がひとつの生命体として自然と外に向かって成長しようとする時期や、内に向かって音楽を深めていこうとする時期があざなえる縄のごとく繰り返し現れているように感じられます。

さて、31年目からの将来に向けての選曲について一言で述べるならば、創立時の活動指針の原点に立ち返るということです。この30年間の活動を通じて、音楽の様式的に取り上げるべきものは一通り取り上げてきたといえます。またそれぞれの時代様式の音楽をどのように演奏したらよいかという方法論、技術論あるいは思考の方法は私自身の中にも、そして合唱団の中にも蓄積されてきています。今後は、それらの事をさらに深め、歌う人にも聴く人にも楽しい合唱を目指したいと思います。合唱団としての究極の目的はヨーロッパの合唱音楽の演奏を極めていくことですが、活動指針にもあるように、同時に合唱団に参加する人々の心を豊かにすることを忘れてはなりません。そのことがさらに合唱団の周辺の人々の社会をも高めていくことになるでしょう。まず来年はルネサンスからバロック時代のイタリア音楽を取り上げます。再演になる曲も含まれますが、以前と比較してどのような演奏になるかとても楽しみです。これからの合唱団は、新しいレパートリーを追い求めていくよりは音楽の内的要素を追求していく時代になるように思えます。ゆっくり、しみじみと歩んでまいりましょう。